



Title	南洋文学の研究 : テクストからの出発 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	土屋, 忍
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第6888号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/53937">http://hdl.handle.net/2115/53937</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Shinobu_Tsuchiya_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 土 屋 忍

主査 教授 中 村 三 春  
審査委員 副査 教授 押 野 武 志  
副査 教授 櫻 井 義 秀

## 学位論文題名

南洋文学の研究 ―テキストからの出発―

本論文における「南洋」とは、第一次世界大戦頃から用いられた「南洋群島」、および大正期から教科書などで用いられ、戦後になって定着した「東南アジア」を包括する地理的概念であり、「南洋文学」は、この南洋のイメージの側面を文化的表象として形成した文学を指す。

本論文の目的は、従来、柳田泉・矢野暢・川村湊・神谷忠孝・木村一信らによって基礎的な研究が行われてきたこの分野に関して、作家とその周辺情報については必要のある範囲で取り上げ、思想的な尺度からではなく、テキストそのものを尊重してその読解を重視する態度によって考察を行うことにある。本論文は、その結果として南洋文学のテキストを明確に把握し、東洋と西洋の引用の織物として構成される南洋を新たに浮かび上がらせようとするものである。

南洋文学の研究の嚆矢となったのは明治翻訳文学・政治小説研究者の柳田泉であり、「海洋文学」の名で南洋文学についての研究を行った。その後、その後継者はしばらく現われなかったが、一九七〇年代に入り、国際政治学者・地域研究者の矢野暢による研究が行われ、「南進」と「南洋」に関心が集まる契機となった。一九八〇年代以降、日本においては京都大学東南アジア研究センターが東南アジア研究の牽引役となった。その後、矢野や神谷忠孝らによって、南洋文学の研究は東南アジア研究の一隅をなすこととなった。また川村湊をはじめ、多くの研究調査と分析追究が行われ、たとえば阿部知二・丹羽文雄・北原武夫・寺崎浩・高見順・井伏鱒二・火野葦平などの多数の作家が、個別作家研究の中で追究された。ただし、現在のところ、それらを全体として総覧するような取り組みは現れていない。

本論文は、これらの先行研究の積み重ねを踏まえ、広く日本文学を研究するとともに東南アジア研究や東南アジア文学にも目配りを怠らず、それらを本論文における南洋文学研究の基盤としている。本論文の大きな特徴は、特定の作家・作品にこだわらず、多数のテキストをそれぞれ詳細かつ横断的に考究することにより、南洋文学のテキストをその総体像において解明することにある。本論文の立脚点は、論文題目にあるように「テキストから出発する」ということである。歴史学・政治学・社会学などの成果を参照しつつ、最終的にはテキストの読解そのものをもって、南洋文学の本質と展開を追究するのが本論文の方法である。

本論文の研究成果は、以下の三点にまとめることができる。

第一の研究成果として、本論文は、一九八〇年代以来、活発に論議されてきた戦前・戦中期における日本のいわゆる「外地文学」の中でも、総体的な追究が乏しかった「南洋文学」に関して、初めてその定義を与え、全体像を明らかにしたことが挙げられる。従来、諸研究者により個別の作家・作品についての研究は行われていたが、ゆうに十指に余る作家・作品を横断的に論じ、特に「テキストからの出発」により、「南洋」イメージの形成に重点を置いて論じた点において、本論文は画

期的なものである。

第二の研究成果として、本論文は、実地での体験と芸術的な想像、あるいは体制への迎合かそれへの批判かといった従来の二項対立の紋切型を拒み、「テキストからの出発」にこだわることにより、現代の文学研究において最も要求される表現・表象の追究という次元において、「南洋文学」の実態を丹念に解明したことが挙げられる。特に金子光晴や岡本かの子の作品について、単に当時の時局や作者の伝記に還元するのではなく、独特な文芸様式としての読解を施した点が評価できる。

第三の研究成果として、従来ほとんど論じられることのなかった幾つかの重要な作家・作品について、およそ研究史上、初めて詳細な分析を与えたことが挙げられる。山田美妙・押川春浪・小出正吾・高浜虚子・折口信夫などの作品がそれであり、特に最後の高浜の「南洋俳句」及び折口の「南洋短歌」については、その存在は知られていたものの、正面から取り組んだ研究は全くなかったと言ってよい。同様に森三千代の業績についても、あくまでもその作品そのものを尊重し、ここでも「テキストからの出発」によって、その文学的な評価を一新することとなった。

一方、多数の作家・作品を取り上げたために、論文全体としての一貫性にいささか欠けるきらいがあること、また、方法論や定義に関しては固定的にとらえず、対象となるテキストに応じて柔軟に適用していること、さらには一般理論的立場に関してやや自覚的でないこと部分もある。しかし、これらの問題点は、本論文が対象とする作家・作品の多様さと問題意識の重大さに由来するものと考えられ、総合的には論者の研究成果を損なうものではないと考えられる。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。